

ワンポイント・ブックレビュー

ルトガー・ブレグマン著『隷属なき道－A Iとの競争に勝つ：
ベーシックインカムと一日三時間労働』文藝春秋（2017年）

ベーシックインカム（以下「B I」と略記）とは、生きていくのに必要な所得を、政府が個人に無条件に給付する制度である。

莫大な費用がかかり実現不可能だ、金持ちに支給するのはおかしい、そんなことをしたらみんな働かなくなってしまう。そう思われるだろうか？

本書によれば、過去に部分的あるいは実験的に実施されてきたB Iはいずれも肯定的な結果を残している。また、英国、米国、オランダなどではホームレスに現金を給付する実験が行われ、従来の「対策」費用を大きく下回る経費でホームレス「問題」を解決するという成果をあげている。

本書で取り上げられている事実を見る限り、B Iは“ペイ”する。金持ちにB Iを支給することは感情的には納得できないかも知れないが、コスト面では有利だろう。それ以上に、貧困層だけでなく、全員がもらうところに意味がある。

2000年代後半の数年間、B Iに関する論議が広がりを見せた。グローバル化を背景に格差が拡大し、社会保障などの各種制度の“賞味期限切れ”が明らかになる中で、解決の処方箋のひとつとして、B Iが脚光を浴びたのだろう。

最近、ふたたびB Iについて目にする機会が増えてきた。昨年、スイスでB I導入の是非を問う国民投票が実施された（結果は否決）。今年1月からフィンランドで（失業者対象）、また6月からカナダ・オンタリオ州で（貧困層対象）、いずれも大規模な実験がスタートし、米国ハワイ州では最近、B I導入に向けた作業部会を設置する法案が州議会で可決された。

格差や貧困の問題が解決するどころか深刻の度を増している。他方では、A I（人工知能）の進化と普及が進み、近い将来多くの雇用が失われると予測されている。そうした状況が、最近のB Iへの注目の背景にあるのではないか。

本書の邦題とは裏腹に、第8章は「A Iとの競争には勝てない」と題されている。雇用が減少する状況下では就労促進によって貧困を解決しようというアプローチは効果が望めない。B Iによる再配分と労働時間短縮をはかるべきだとブレグマンは言う。

貧困問題をはじめとする社会問題解決のために、ブレグマンはB Iと並んで「国境線の開放」を提唱する。こちらの方がB I以上にラディカルな提案とも言える。ブレグマン自身はGDPに懐疑的な目を向けているが、国境を開くことで「世界総生産」はめざましい成長を示すと予想されている。

ブレグマンの構想は壮大で、英語版の原題「現実主義者のための理想郷（Utopia for Realists）」が示すようにユートピア的であることを隠さない。政治を通じて大きな変更を実現するために必要なのは、「ユートピアは確かに手の届くところにある」という確信だと強調する。歴史的事実とデータを重視する現実主義者であると同時に、よりよい世界の実現を求めて止まない理想主義者として、ブレグマンは「大文字の政治」の復権と、常識に流されない図太きこそ求められると本書を結んでいる。

なお、ベーシックインカム論の歴史的な脈、思想的・運動史的な背景などは山森亮著『ベーシック・インカム入門』光文社新書（2009年）に詳しい。また、リフレ派のエコノミストとして知られている原田泰は、『ベーシック・インカム』中公新書（2015年）で、日本におけるB Iの実現可能性を実際に試算している。参考にされたい。（湯浅 論）